

“ひろせ川教室” 開設後2か月を経過して

前橋協立病院 小児科 深澤尚伊

きっかけ…目の前の霧がずっと晴れた

昨年、ぐんま教育文化フォーラムと群馬子どもの権利委員会共催の企画で、“「子どもの貧困」の実態と支援体制を考える講演会”があると聞いて参加した。講師は、埼玉県「彩の国子ども・若者支援ネットワーク」代表理事の白鳥勲さん。高校教師の経験のある方だ。生活保護家庭の中学生を対象に行われている取り組みについて、テレビで取材を受けた時の動画も見せてもらい、苦しんでいる子どもの現状に、猶予ならない事態になっていることを実感した。当時、私たちの病院も加盟している全日本民主医療機関連合会(民医連)の小児科でも、子どもの貧困への対応についてメーリングリストで議論が盛り上がっていた時でもあり、目の前の霧がずっと晴れた。講演後の意見交流の時間で、無料塾の準備をしていることをフロア発言した。

医療生協の研修会に白鳥さんの講演会

10月6日には、私たちの医療生協の地域支部役員と事業所職場責任者対象の研修会に、白鳥さんの講演会を独自に開催してもらうことになった。ここで、地域と職場で中心になっている方々に、無料塾を通しての「子どもの貧困」への取り組みの重要性を知ってもらった、と思う。引き金となった教育団体の世話人の方々との懇談の場や、私の大学時代のバスケ部(群大三学部合同)の仲間や後輩が、県内の教育現場や行政で主要な役職についていることも取り組みを加速させる要因になった。

2月に教室オープン・・・

苦勞と喜びの日々

受け皿づくりの現状を見ながら、まずは病院に近い一つの小学校の子ども達を対象に、校長・教頭との話し合いも行い、今年2月に開始。全対象者に希望を募り11名の生徒が通い始めることになった。



動き始めてみると、教育現場の方々が日々苦勞しているであろう問題に、毎回突き当たる事になった。私たちが対象にしたのは、白鳥さん達が始めた「中学生」ではない。辛い思いを続けた結果としての、“不登校”や“閉じこもり”といった課題には、あまりにも力も経験も無く、子ども達にとっても、学力低下を来さぬ前からの「予防的取り組み」というのが当たっている。ボランティア確保のための担当者を配置してもらったので、私は全体を見渡す役で参加していた。人手不足の時に、一人の女子を担当したが、最初から怪訝そうな眼差しで見られ「怖い」「くさい」と、こちらがめげそうになる言葉を浴びせられた。すぐに、女性職員が「関係ない！」と一喝して、その後は彼女が対応に当たった。楽しそうに勉強している姿を見て、複雑な気持ちで一応安心。翌週からは、「教室」へ行く途中で一緒になっても、タッチしてきたり、帰宅時には手を振ってくれたり、と嫌われていないことを実感し、なぜか喜んでいる自分。

休憩時間には、大縄跳びが大人気であるが、子どもの歓声は社会からは不愉快に聞こえるのか、「うるさい」との非難がアパートの上階から投げかけられる。毎回毎回、課題が現れるが、子ども達の学ぶ権利・遊ぶ権利の視点で、取り組みを続けたいと更に決意を深める日々である。